

パネル

リアンな壁をはるかに超え、老若男女を問わず、全国的な信仰運動を展開させ、多くの人々を魅了した。しかし、一方、彼が起こした「宗門革新運動」といった事実でわかるように、彼は「法主」を中心としてきた大谷派の伝統・伝灯を非常に重視していた人でもある。換言すれば、近角は「近代代」な宗教活動をしていた反面、「反近代代」と定義される伝統主義者でもあった。こうした逆説的な事情を明らかにすることによって、日本近代仏教のあり方を新たに考察することが出来る。同時に、大谷派における「近代教学」の意義を再考する意味において、晩年の近角の位置づけは重要な課題であると思われる。

求道会館所蔵史料の意義

—— 整理作業中間報告 ——

大澤 広 嗣

本発表は、平成二〇—二一年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)「近代化の中の伝統宗教と精神運動——基準としての近角常観研究」(課題番号二〇五二〇〇五五、研究代表者 岩田文昭大阪教育大教授)の一環として実施している、求道会館所蔵史料の整理作業について、その中間報告を行うことを目的とする。

真宗大谷派僧侶の近角常観が信仰運動の拠点とした求道会館(東京都文京区本郷六丁目二〇番地五号)は、大正四年に落成

した地上二階の建造物で、信者と支援者などからの寄附金により建設された。設計は建築家武田五一で、施工は戸田建設創業者の初代戸田利兵衛である。昭和一六年に常観が没した後、弟の近角常音が活動を継承した。しかし昭和二八年に常音の死去後、長らく閉鎖されてきた。その後、史料は手付かずのまま、今日まで未整理で残されてきたのであった。なお会館は、平成六年東京都指定有形文化財となったことを機に、平成八年から修復工事が行われ平成一四年に完工した。現在、会館は各種行事に使用され、常観の令孫である建築家の近角真一氏が管理をしている。

本科研では、平成二〇年より求道会館所蔵史料の整理と目録化を進めてきた。研究代表者である岩田の指示により、研究協力者の大澤・碧海寿広・小田晃生によって作業を分担している。またライアン・ワルドからも協力を得ている。ならびに本科研では常観が発行に関係した雑誌『政教時報』(明治三二—三六年、大日本仏教徒同盟会)、『求道』(明治三七—大正一一年、求道発行所)、『信界建現』(昭和五一—一三年、同所)の電子化を行った。当該のデータは、平成二一年一月発行の中間報告書にDVD・ROMとして所収した。

求道会館所蔵の史料群は、次のとおりである。主には、書簡・名刺・電報・領収書・帳簿類・日誌・写真・蔵書・各種書類・前掲雑誌の校正刷りと各執筆者の自筆原稿、である。史料の総点数はまだ確定していないが、概算で約一万五〇〇〇点と考えられる。書簡については、平成二一年七月に仮目録の入力作業が終了して、その後は修正作業を進めている。平成二一年

八月末日現在で、約一万点の書簡を確認した。多くが常観宛の書簡であるが、弟の常音など関係者宛の書簡も含まれる。

書簡目録から指摘できることは、常観の影響力と人脈が読み取れることである。常観宛の書簡は、交友があった仏教界関係者、常観の説教を聞法した者、全国各地の信者などからのものである。とくに求道会館は東京帝大と一高の近隣に位置することから、両校の教官・学生・出身者など知識人層の書簡も多い。また常観は大谷派僧侶だが、本願寺派など他宗派僧侶からの書簡もあり、一派に収まらず仏教界に大いに影響を与えていたことが伺える。因みに同地は浩々洞発祥地でもあり、清沢満之など浩々洞関係者宛の書簡もある。

注意すべき点は、はがきよりも便箋の方が、情報量は多いことである。常観は、その存在ゆえに各方面の著名人からの書簡が多いが、年賀状からは人柄と教養が見えて興味深い文字数は少ない。むしろ便箋に書かれたものが情報量は多く、そこには有名無名を問わず、様々な人物からの信仰告白が記されていることが少なくない。一例を挙げれば、宮沢賢治の父である政次郎は、熱心な真宗信者で常観と親交があった。政次郎の書簡もあるが、賢治の妹トシが常観に宛てた書簡二通（大正四年四月二四日、五月二九日付）が残されている。日本女子大に入学したばかりのトシの心の内面がそこに記されているのである。

本科研は、平成二三年度までの継続を予定している。求道会館所蔵の史料について、分類と評価は今後の課題である。最終年度までに、重要な書簡の翻刻、史料総目録の公表を計画しており、常観の影響力を実証的に明らかにしたいと考えている。

パネルの主旨とまとめ

岩田文昭

真宗大谷派の僧、近角常観は東京本郷に求道会館・求道学舎を設け、そこで大正・昭和初期の主として知識人青年に大きな影響を与えた。しかし、近角の研究はこれまで皆無といってもいい状態であった。そのような状態となっている理由はいくつかあるが、その最大の理由として、近角の存在意義が従来の学問の内部に納まりがたいことをあげることができる。その影響は、さまざまな学問分野に属する領域に及んでいる。個別の学問は日々進歩し、その分析が精緻になるだけに、かえって、学問横断的な影響力を残した思想家の姿は捉えにくくなる。本パネルの発表者は、さまざまな宗教研究への関心をもち、よってたつ学問的方法論も異なる。本パネルは、異なった視点から、近角を論じること、これまで看過されてきた日本の近現代の宗教史・精神史のいくつかの側面に新たな光をあてることを試みたのであった。

発表者の碧海寿広は、近角が刊行した雑誌『求道』に記載されている信者の信仰告白の形態に着目し、近代における新たな信仰告白の登場の意味について考察した。岩田文昭は、近角の説教を聞いた知識人青年の近角受容について、とくに二人の宗教哲学者、三木清と武内義範の思想を取り上げて論じた。ライアン・ワルドは、大正後期から生じた「句仏上人の僧籍削除問